

第2期中頓別町総合戦略について

中頓別町役場総務課政策経営室

◆ 町の概要

1 まちの様子

1) 位置・地勢

中頓別町は、北海道の最北にある宗谷管内に属し、北緯45度線上に位置しています。北海道第2の都市である旭川市まで約170km、総合病院のある名寄市へは約90kmの距離があります。

まちの中央部には、標高703mの敏音知(ピンネシリ)岳がそびえ、まちのシンボルとなっています。さらに周囲を自然豊かな山々に囲まれており、これらの山々に水源を発する支流が合わさり、まちを流れる頓別川と兵知安(パーチャン)川になっています。

この流域に平らな土地や緩やかな丘が広がっており、市街地や集落が形成されています。

2) 歴史

砂金の発見により始まった開発

中頓別町の開発は、明治30(1897)年頃に頓別川で砂金が発見されたことに始まり、頓別川一帯には、砂金採取に入り込む者が急増。その後、開拓が本格的に始まります。



砂金の川(頓別川)



- ▶ 明治33(1900)年に開拓が本格化し、翌年^{ならはらたみのすけ}植原民之助により中頓別の農耕が始まる。
- ▶ 大正5(1916)年、宗谷線鉄道(旧天北線)が中頓別まで開通し、翌年中頓別郵便局が設置され、中頓別小学校が開校した。
- ▶ 昭和24(1949)年11月1日に、中頓別は村から町へと変わり、町立国保病院や農業高校ができたこの頃、家の数は1,351戸、人口は7,492人だった。農業は、昭和31(1956)年頃から牛を中心とした「酪農」に力を入れるようになる。
- ▶ 昭和50(1975)年頃になると、養護老人ホームや

町民センターが建てられ、図書館や郷土資料館、寿公園などが整えられた。一方、平成元（1989）年5月1日に鉄道が廃線となり、代替バスの運行が始まった。

▶ 令和元（2019）年、町開拓110年・町政施行70周年を迎えた。

3) 地理

中頓別町は、最も近い空港がある稚内市までは約100km、旭川市までは約170km、札幌市までは約310kmです。

平成元（1989）年に鉄道が廃線となり、地域を運行している路線バスは1路線のみです。

そのため、多くの町民が自家用車を保有していますが、高齢になると運転が難しくなる場合もあります。そのため、地方創生推進交付金を活用して、平成28（2016）年に新たな交通体系の確保として、自家用車の乗り合いを実施するライドシェアの実証試験を経て、令和元（2019）年より本格運用に取り組んでいます。

◆ 人口減少について

令和2（2020）年3月31日にまとめた人口ビジョン令和2年改訂版「総人口の長期的見通し」では、平成27（2015）年国勢調査の総人口1,757人を基準年に人口推計を算出したときに、国立社会保障・人口問題研究所の推計では令和2（2020）年に1,543人としていたため、町独自により緩やかな人口減少を目指す取組を実践して、予測した推計ケースは1,578人となりました。

令和2（2020）年国勢調査による人口は1,638人となり、結果として60人の人口減少を抑えられたかたちとなりました。平成28（2016）年から推進してきた子育て支援や、就業支援などメニューの工夫によることが要因のひとつであると分析をしています。10年後となる2030年（令和12年国勢調査）の町独自の人口予測は1,306人としたため、この予測値を下回らないよう

人口減少の抑制を図ります。

2020年の人口予測をした数値の比較

	2020年の人口
① 社人研の推計	1,543人
② 町独自の減少推計	1,578人
③ 国勢調査の数値	1,638人
A = ③ - ②	+60人

◆ 第2期総合戦略について

令和2（2020）年3月に策定した第2期中頓別町総合戦略では、人口減少抑制のため、第1期総合戦略で課題とした「生産年齢人口の転入者の増加」が解決しなければなりません。

さらに「3つの基本的な視点」として、①人口減少・超高齢社会を前提とした町を構築する、②地域資源を最大限活かした取組、③小規模自治体ならではの特性を活かし柔軟に施策を展開する取組を推進し、「働きたい」「暮らしたい」まちとして選ばれる癒しの里「中頓別」を目指す姿としました。

これに関わる基本目標を次のとおり4つ設定しました。

基本目標

- 目標① 多様な働き方ができる魅力あるまちをつくる
- 目標② 魅力ある教育環境を整え、結婚・出産・子育てを支援できるまちをつくる
- 目標③ 都市部とのつながりをつくり、移住者の支援ができるまちをつくる
- 目標④ ひとが集う、安心して暮らし続けられるまちをつくる

◆ 総合戦略の主な成果

1) 町内の林業資源の活用拡大

令和2（2020）年度において、未整備山林所有者への施業推進によって間伐が実施され山林の集約化にもつながったことから、第1期総合戦略策定から、第2期においても継続して目標設定をした結果、5年連続して数値目標を上回ることができました。

路網整備の継続により間伐が実施され山林の集約化にもつながっています。



林業施業の様子

2) 商工業支援制度

人口減少により、当町のような小規模自治体における商工振興は、まちのにぎわいと活性化に寄与する大切な産業であることから、起業や事業承継は必要な取組です。

経営支援や店舗新築への支援メニューを充実することで、令和2（2020）年度ではカフェや飲食店の起業につながり、さらに令和3（2021）年度には経営支援や店舗リフォーム、町内ガソリンスタンドの事業承継により雇用の継続につながっています。

3) 介護福祉士等の専門職人材確保

地方における少子高齢化による働き手の確保は苦慮する状況です。特に福祉施設における介護福祉士等の

有資格者の確保は定員数までも確保しにくい状況であるため、社会福祉法人が実施する「社会福祉事業を行うための職員養成」に必要な経費の一部を助成することで、令和3（2021）年度には4名の有資格者育成に大きく寄与しています。

4) 地域青年交流の場設定

町内で暮らす若い世代の交流を促進するため、業種や地域を越えて交流する機会を設けることで出会いの場を設ける「なかとんべつ青年交流事業実行委員会」が平成27（2015）年に設立されて以降、自分磨きに関する研修会を定期的に開催するとともに、平成28（2016）年度からは婚活事業等を実施しています。

自分たちのことは自ら課題解決に取り組む意識醸成が育まれ、平成30（2018）年度までに年3回平均で研修会が行われているほか、婚活は4回実施されました。平成31（2019）年度には第1号の入籍者があったほか、令和2（2020）年度にはコロナ禍の中オンライン婚活を開催するなどし、毎回カップルが誕生しています。

令和3（2021）年度はリアル婚活を開催し4組、令和4（2022）年度は2組のカップル成立に至りました。

今後も青年交流の場づくりを工夫して実施しながら、より広く交流する場をつくっていくこととしています。

5) 新しい6次産業化の展開に向けて、ワイン用ブドウ試験栽培がスタート

平成29（2017）年度にワイン醸造を目指したブドウの実証栽培が始まり、幼木の育苗や、気候の寒暖差による確認など生育環境を検証しました。令和2（2020）年秋にはブドウを育てる専門スタッフを配置するなどし、その年は収穫可能となる結実となり約2kgが獲れ、糖度と酸味がおおむね目標値に近づく結果となりました。

翌令和3（2021）年度には約23kgを収穫、ワインづ

くりに必要となる糖度20%に達する実りとなりました。

また令和4（2022）年4月には将来の本格稼働に向けて町民主体の「ブドウ研究準備会」が設立。醸造用ブドウ栽培の年間スケジュールの確認や、ワイン以外の副産物の利活用について検討されることとなりました。



ブドウ試験ほ場での町民見学会

令和4（2022）年度は約22kgの収穫量で、今後は令和5（2023）年度に商業用ほ場を拡大して苗木の定植、ジャムなどの副産物の販売を行いながら令和10（2028）年度にワイン醸造ができるよう計画・実行を目指しています。

◆ 今後について

「“働きたい” “暮らしたい” まち」として、一人でも多くの方から選ばれるように、4つの基本目標を達成に重要な施策を実施するとともに、基本的方向と具体的施策・KPIを評価・検証し、有効的な推進のため各種事業に取り組んでいきます。